'I am a cat' class 思い付く事など(3)

Junko Higasa

心の鐘

現代空間を呑気に漂っていた私は『吾輩は猫である』講座を聴いて一気に「明治」の穴にストンと落ちた。日本の習慣の中に豊かな知恵を見出しては感心しつつも、ほとんど西洋化している私の心身は、想像的に例えて言うならば大気圏を抜けるロケットの衝撃を受けたも同然だった。私は厭世的な人間である。だから現地点に立ちながら様々な世界を覗くのではなく容易に根元ごとタイムスリップしてしまう。頭の中が「明治時代」に傾いていく中で、心身共にところどころ日本の規格品から外れている私は、生まれてからこの方享受してきた西洋を失いたくはなかった。その西洋と東洋の狭間の抵抗が「臨時の気違い」を通り越して、芥川龍之介の『河童』に転じたら困る。ということで、現実に踏みとどまるために『寺田寅彦』（小山慶太著・中公新書）を読んで少し科学に触れたが、今度はその中に記された「漱石を慕う寅彦」にはまり、彼の随筆集を買って読み始めた。「何故寅彦か？」それは私にとって「何故漱石か？」という疑問に等しい。明治から離れたければいくらでも道はあるだろうに。

『寺田寅彦随筆集』全 5 巻（岩波書店）約 1500 頁の最初の 30 頁を読んだ時点で、私の感覚の中に「寅彦は孤独を抱えていた」とう言葉が滑り込んだ。そのときふと感じたのは、漱石はこの孤独を見抜いていたからこそ寅彦に文章を書くことを勧めたのではないだろうかということだ。文学は時代に呼応して先んじて発表した者が、科学は時代に関わりなく先んじて発表した者が勝つという一種の戦いである。文学はほとばしる筆がそのまま結果をもたらすが、科学は立証が必要になる。文学者にとって時間は自己の内にあり、科学者にとって時間は自己の外にある。つまり科学者の方が心の時差は大きい。内なる戦いは孤独である。時間を待たなければならない戦いは一層孤独である。ここまでは誰しも共通のことであるが、こと寅彦においては、漱石の存在を心の頼みとする彼においては、別の意味の孤独が内在していたように思う。誰かをそれほど好きになる。それは生きている寂しさの穴埋めでもある。それをわかっていただろう漱石はその孤独の時差と落差を埋める術として「科学では割り切れない君の内なるものを表現してごらん」と文筆を勧めたのではないだろうか。「それが君の心の解放であると同時に、それが君の真なる姿だ」文章は自己から生まれ出る主観であり、自己を映す客観という名の鏡である。漱石は単に寅彦の文才を引き出し、彼の科学を世に紹介しようとしただけでなく、心の底からにじみ出る「ころ柿の甘味」によって寅彦の心を開放したように思う。漱石は冬の枯野をわたる風に乗って届く寅彦の孤独の鐘のかすかな音色を聞いた。それを捉えたのはやはり内なる孤独を抱えた漱石の鋭敏な心である。聞き手を得た鐘の音色は、打たれるごとに少しずつ敬愛の響きを遠慮がちに含む音へと変わっていった。

さて、このような感覚で『寺田寅彦随筆集』を 100 頁まで読み進んだところで、寅彦のヴォキャブラリーの豊かさが漱石を彷彿させた。思わず漱石の小説のページを開く。するとなんだか広い心持がしてホッとする。漱石は広い。寅彦は深い。ラフマニノフの『鐘』のように、彼らはそれぞれの人生の四季をそれぞれの音色で表現しながら師弟の合唱を聞かせる。誰に？孤独を抱えて人生に迷う未来の私たちに。(2012.2.18)